

〔八丈島における遺伝・育種資源の収集・評価・保存・増殖〕  
クズウコン科植物の切葉としての特性評価

菊池知古・金川利夫  
(島しょ農林水産総合センター八丈事業所)

-----  
【要 約】切葉生産の新品目として、クズウコン科6種の収量、品質、日持ちなどについての季節変動を明らかにする。種類により収穫ピーク(量・サイズ)にずれがあり収量も異なった。日持ちが良好であり、市場評価も高く、切葉として有望である。  
-----

【目 的】

八丈島の切葉の中心はフェニックス・ロベレニーであるが、鉢物用に栽培されているクズウコン科植物の切葉としての出荷が、青ヶ島も含め検討され始めている。しかし属や種の違いによる季節ごとの収量や、出荷後の日持ちのデータが無い。本試験では、八丈島の無加温ビニルハウス内で越冬していた種の中から観賞用に適したクズウコン科植物を選び、収量および出荷後の品質保持を明らかにするために、高温時期を中心に経時的に調査する。

【方 法】

クズウコン科6種(図1参照)を2005年5月上旬に株分けし、約60%遮光・無加温ビニルハウスに、畝幅90cm、株間30cm×条間20cmで定植した。施肥は、定植前にバーク堆肥を3t/10a投入し、追肥として被覆肥料(N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=14-12-14)を計21kg/10aになるよう7月中旬、9月中旬の2回に分けて施肥した。7月~12月に毎月収穫し、サイズ別収穫枚数、出荷後の日持ち(模擬出荷として結束し一晩水上げし、2日間ビニル袋に入れて出荷箱で梱包後、室温で花瓶に活けた)、市場評価について調査した。

【成果の概要】

- 1) 月ごとのサイズ別収穫枚数(図1)は、オッペンハイミアナは収穫サイズの割合が比較的一定、メディオピクタは9月から大きいサイズが取れ始めたが同時に開花期に入り11月以降の収量が激減し、ルイーザエは9、10月に株あたり10枚以上収穫でき、特に10月から大きなサイズがとれ始めた。以上の3種は9月、10月に収量が多かった。‘フミリオ’や‘グレー・スター’は10月から大きなサイズの収量が増加した。‘グリーン’も同様であったが、高芽切りのため多い月でも株あたり0.7枚であった。
- 2) 出荷後の日持ち(図2)は、‘グリーン’以外は7月~12月のいずれも1週間は品質を保持した。品質低下の原因は、オッペンハイミアナは黄化、メディオピクタは日持ちは良いが一斉に黄化、ルイーザエは葉縁部の巻き上がり、‘フミリオ’は黄化だが冷涼期の日持ちは良好、‘グレー・スター’と‘グリーン’(9/2の急激な低下は、水上げ時のどぶ漬けによる黒斑が原因)は葉縁部の巻き上がりであった。
- 3) 市場評価は、出荷枚数が少ない場合および40~50cm以上のサイズで比較的単価が高く、平均20~30円、最高60円であり、特に‘グリーン’は30~50円を維持した。また病虫害に関しては8月下旬に斑点病が発生した程度で、それも点滴灌水により治まった。
- 4) 以上の結果から、収穫物が軽く調整も容易で、薬散も殆ど不要、日持ちも良く単価も高いクズウコン科植物は切葉として有望であることが示された。

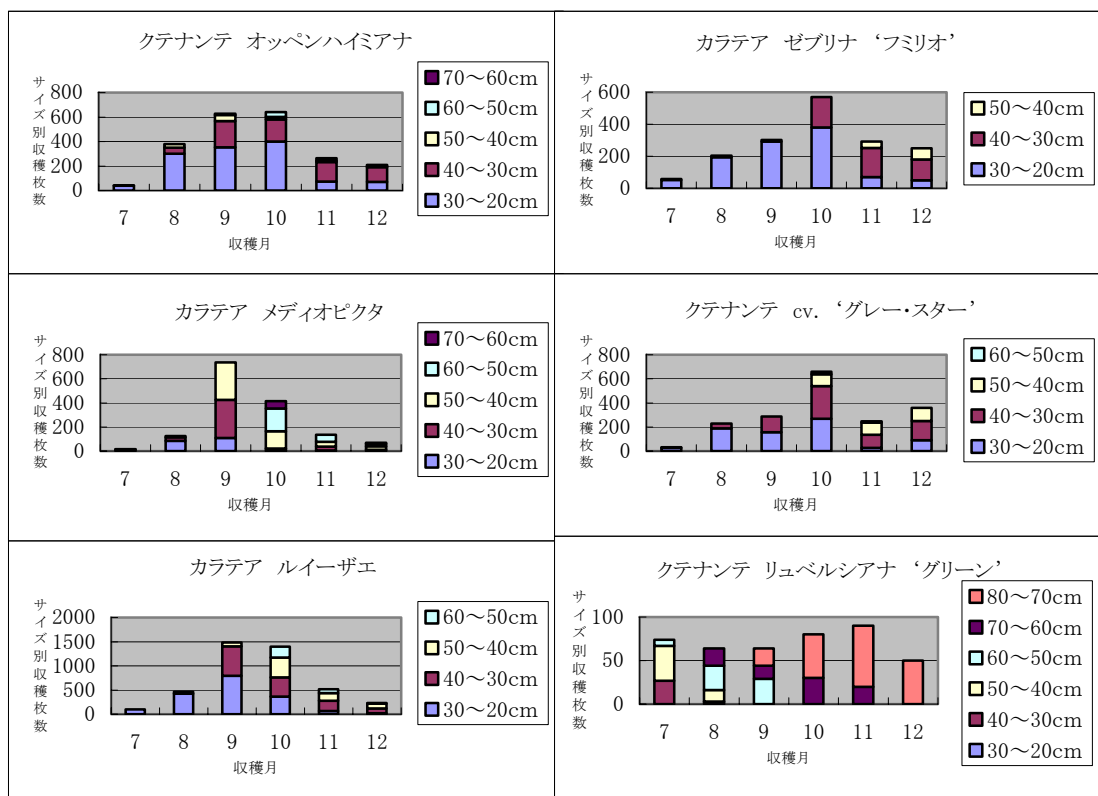


図1 月ごとのサイズ別収穫枚数

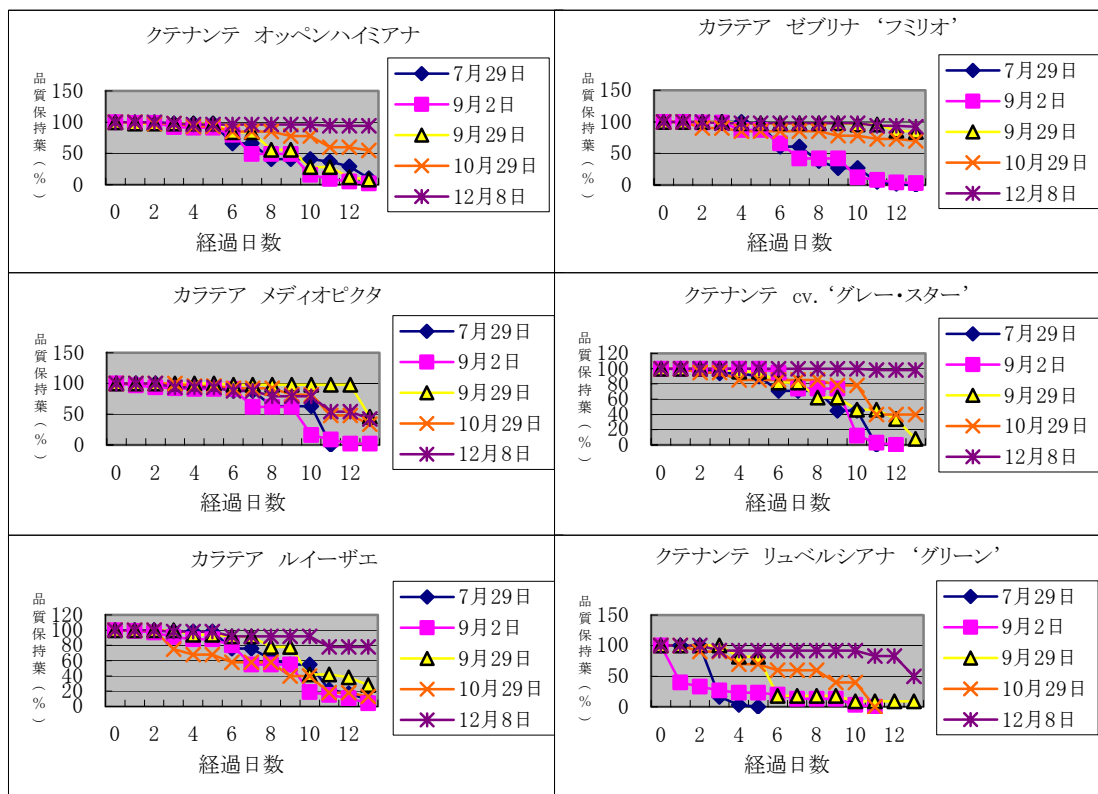


図2 収穫時期別の品質保持日数